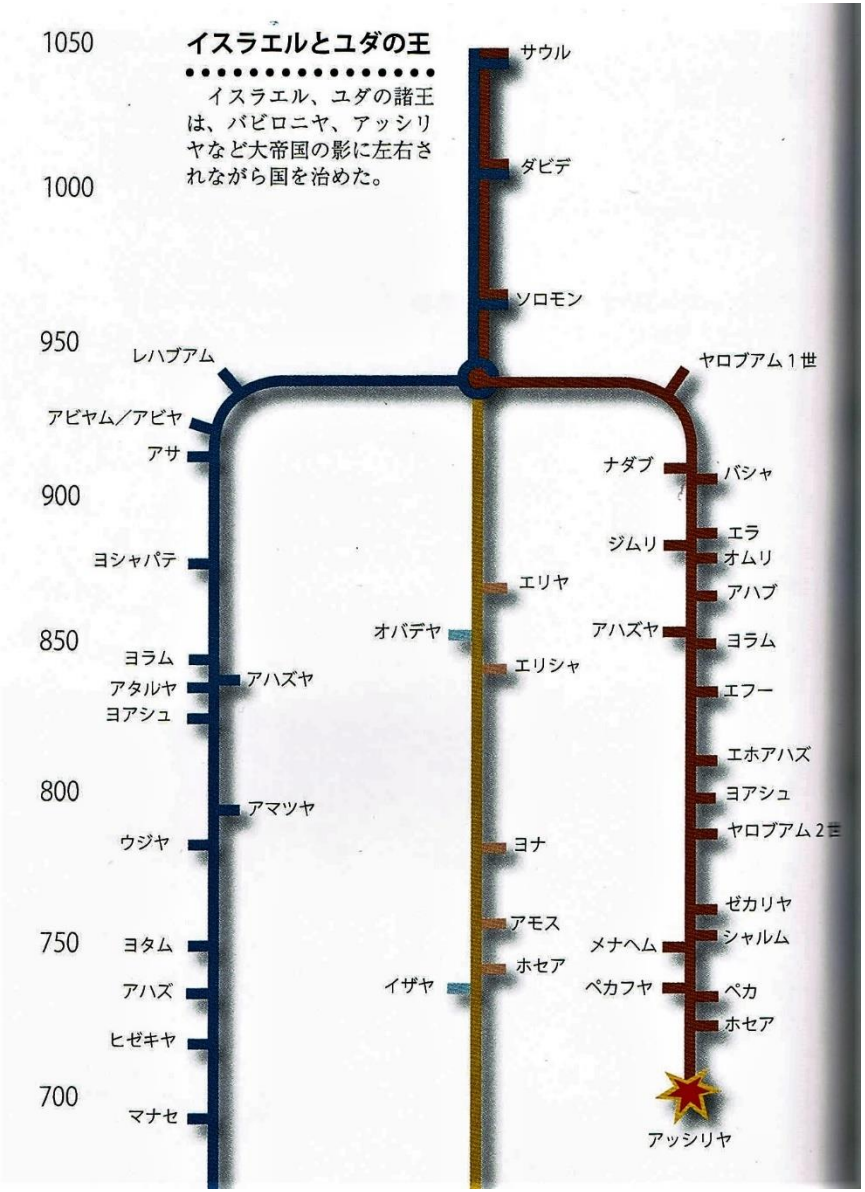

2023 年 3 月 5 日　説教「事がなされる時」

列王記第二 9 章 27～37 節

先週は 9 章 14～26 節を通して、北王国イスラエルのヨラム王は、イズレエルにおいて、王となるエフーによって命をとられます。それは、預言者エリヤを通して、与えられた預言（Ⅰ列王 21:29）の成就でもありました。

1．ユダのアハズヤ王の最期（27～29 節）

①アハズヤ王の死（27）**「ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハガンの道へ逃げた。エフーはそのあとを追いかけて、『あいつも打ち取れ』と叫んだので、彼らはイブレアムのそばのグルの坂道で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。」**イスラエル王ヨラムが殺されるのを見て、ユダの王アハズヤは逃げました。ベテ・ハガンというのは、イズレエルから南へ 10 ㌔ぐらいの所でした。エフーはそこへの道を追跡します。部下に「あいつも打ち取れ！」と。相手はユダの王ですが、ためらいがありません。イブレアムのそばのグルの坂道で負傷させました。アハズヤはなおも西に逃げます。メギドまで追い、ついにアハズヤは死にました。

②アハズヤの葬り（28）**「彼の家来たちは彼を車に載せて、エルサレムに運び、ダビデの町の彼の墓に先祖たちといっしょに葬った。」**アハズヤの家来たちは、その遺体を馬車に載せ、南のエルサレムまで 80 ㌔ほどの距離を運びました。そして、ダビデ以来続き、彼の先祖たちが埋葬されている墓に葬られました。王の死ですから、丁重に扱われたのは、当然であったでしょう。

③アハズヤという人（29）**「アハズヤはアハブの子ヨラムの第十一年に、ユダの王となっていた。」**アハズヤ王については、詳しい記述はありませんが、北王国アハブの子ヨラム王の 11 年にユダの王となっていました。彼が、ユダ王でありながら、母親の影響で不信仰の北王国のヨラムと親交を持ち、その魂がバアル信仰へと傾いていました。

2．アハズの妻イゼベルの最期（30～33 節）

①イゼベル（30）**「エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結い直し、窓から見おろしていた。」**エフーはいよいよイズレエルに入りました。ヨラム王に仕えていた時からの、馴染みのある地ではあります。しかし、今は立場が変わりました。油注ぎを受け、王として認められはじめてからは、初めてです。一方、ヨラム王の母イゼベルは、エフーが来たことを受け、待ち構えます。目の縁を塗って、印象を強くさせ、髪はしっかりと結い直した上で、窓からエフーの部隊を見下ろしていました。

②門に入るエフー（31）**「エフーが門に入って来たので、彼女は、『元気かね。主君殺しのジムリ』と言った。」**エフーが門に入って来ると、イゼベルの方から声をかけました。「元気かね」。ここまでは普通です。その後は刺激的な言い方です。『主君殺しのジムリ』。自分の息子であり、イス

ラエルの王であった主君ヨラムを殺したエフーをジムリにたとえたのです。ジムリはイスラエル王バシャを謀反で殺害。いわば三日殿下で、オムリがが次の王に着きました（第一列王 16 章）。

③イゼベルの死（32～33）**「彼は窓を見上げて、『だれか私にくみする者はいないか。だれかいないか』と言った。二、三人の宦官が彼を見おろしていたので、彼が、『その女を突き落せ』と言うと、彼らは彼女を突き落した。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった、エフーは彼女を踏みつけた。」** エフーは王宮の宮を見上げ、「誰か私の味方となる者はいないか」と呼びかけます。すると、2～3 人の宦官が、エフーに応じるかのように、彼を見下ろしています。イゼベルの部下です。彼らに、エフーは命じます。「その女を突き落せ」。すると、彼らは言われるがままに、イゼベルを突き落したのです。彼女の血は壁や馬にはねかかったというように、衝撃は大きかったのでしょう。エフーはその遺体のところに進み、容赦なく彼女を踏みつけました。

３．**イゼベルの死体（34～37 節）**

①葬りの命令（34）**「彼は内に入って飲み食いし、それから言った。『あののろわれた女を見に行って、彼女を葬ってやれ。あれは王の娘だから。』」** エフーは建物の中に入って飲み食いしたこと自体に何らかの意味はなかったでしょう。しかし、そこで費やした時間がもたらした出来事はありました。彼は部下に言いました。「あののろわれた女を見に行って、葬ってやれ。彼女も王の娘なのだから」と言いました。確かに、彼女はツロとシオンの王エテバアルの子どもでした。

②頭蓋骨等だけ（35～36）**「彼らが彼女を葬りに行ってみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていなかったので、」** ところが、部下たちが彼女の葬りのために、遺骸のところに行ってみると、なんと彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていなかったのです。つまり、エフーが食事をしている間に、イゼベルの遺骸はこのようになってしまっていたのです。これはエフーの意図するところではありませんでした。

③主のことばのとおり（37）**「帰って来て、エフーにこのことを知らせた。すると、エフーは言った。『これは、主がそのしもべティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」** 部下たちは、エフーの所に戻って来て、このことを報告します。すると、エフーは預言者エリヤを通して語られた言葉を引用することになります。エフーにはこのような情報や知識があったのかと思われる向きもあるかもしれませんが、そこはイスラエルの隊長でしたから、いろいろな情報が届いていたことでしょう。エリヤの預言は「イゼベルの死体はイズレエルの地所で、犬たちによって食い荒らされ、畑の上にまかれるこやしのようになる」というものでした。預言の成就でありました。

《結論》エフーは荒々しいところがありました。なにしろ、イスラエルのヨラム王を弓で心臓を射抜き、その後でユダの王であるアハズヤについても、部下に「打ち取れ」と命じました。執拗に追跡して、ついに打ち取りもしました。非情と感ぜられるかもしれません。これがヨシュア記にあるように、その度ごとに、神からの導きを受取り、「聖絶」がなされていくということであれば、納得できても、人間的な力が強く働いているのではとも思う向きもありましょう。しかし、エフーだからこそ、この仕事ができたともいえるかもしれません。

エフーはイズレエルの宮殿にいたイゼベルに対して、イゼベルの部下に働きかけました。普通なら、主人を守ろうとするところでしょう。ところが、2～3 人の宦官は、エフーの命令の通りに、彼女を突き落したのです。9 章の冒頭でエリシャから指示された若い預言者はエフーに油注ぎをして、彼を王に立てました。それは、重要な点でした。その時に、彼は偶像礼拝に走ってきたアハブの係累を滅ぼすことを命じられました。そして、その牙城の奥の院にいたのがイゼベルでした。彼女は、バアルの信奉者として、450 人のバアルの預言者と 400 人のアシェラの預言者を抱えていたのです。そして、主の預言者を迫害して殺しました（Ｉ列王 18:4）。そうしたイゼベルに対しては、妥協することなく、使命感とともに、気迫や馬力を持って対する人が必要でした。エフーはそんな人間だったのです。 新約聖書では「十字架のことばこそは、神の力」（Ｉコリ 1:18）であると伝えられ、罪を全部引き受けてくださった、キリストが解決の道を開いてくださっています。この方を頼りたいのです。そして、最終的には終わりの日の審判が記されていることも忘れてはなりません。

この章には、人間の計画では予想もしない事が起きました。つまり、突き落されたイゼベルの遺体については、エフーも丁重に葬りをする方向で考えていたのです。ところが、彼が飲食をしている合間に、イゼベルの身体は犬たちによって食い散らされていました。残ったのは頭蓋骨と両足と両手の手首だけだったというのです。鳥葬というのがヒマラヤなどではありますが、そんな有様でした。それは預言の成就でした。「またイゼベルについても主は言われる。『犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう。アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬どもがこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう』」（Ｉ列王 21:23−24）。主は、わざわいをくだすのを遅らせておられましたが、ついにその預言の言葉が成されたのです。

私たちのうちにも、人間の計画や予想を越えて、事が成されるということがあります。御言葉が成就する時は、思いがけないものです。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた、大いなる事をあなたに告げよう」（エレミヤ書 33:3）。どっきりなんていうものではありません。人間が考えつかない方法でなされる事があるのです。主の厳粛なるさばきも、恵みによる喜ばしい出来事も、不思議な御手により起こされていくのです。だからこそ、主のみ言葉を差し引くことをせず、主への畏れの心をもって、改めて主への信頼をもって歩んでいきたいのです。